

日本語の部分表現と名詞の文法素性*

石居 康男¹

要 旨

部分表現の性質を通して日本語名詞の文法素性について検討し、日本語の名詞にも可算名詞と質量名詞の文法的区別は存在するが、文法的数に関しては中立であると主張する。「りんごの一部」のような「NのQ」型の表現でN（名詞）が可算名詞の場合に単数解釈も可能となるのは主要部がNではなくQ（量化子）であるためであり、表現全体が指すものがもはやNが指すものに属さない場合でも当てはまる文脈で用いられている場合に限られる。他方、「一部のりんご」のような「QのN」型でNが可算名詞の場合に複数解釈が義務的になるのは、Qが意味的に正しく用いられるために必要な母集合の要素数に対してであり、Nそのものの文法数ではない。

1. はじめに

日本語のように、名詞に単数と複数といった数に関する形式上の区別がなく、数える場合に数詞を名詞に直接付加することができず「助数辞（numeral suffix）」と呼ばれる表現の助けが必要になる一群の言語がある²。これらの言語においては、名詞に「可算名詞」と「質量名詞（不可算名詞）」の区別がなく³、名詞はす

* 本稿の執筆にあたり、川崎典子氏から有益なコメントを得た。また、本研究は神田外語大学研究助成（在外研究）の援助を受けたものである。共に、記して謝意を表したい。

¹ 神田外語大学外国語学部英米語学科教授。

² ここでいう「助数辞」は、一般的には「分類詞（classifier）」と呼ばれることが多いが、本稿では飯田（2019）の用語を採用した。飯田（2019）/Iida（2021）では「助数辞」をさらに3つに下位分類するが、その中に「分類辞」があり、紛らわしいため、「分類詞」という用語を避けることにした。

³ 以下、「不可算名詞」という用語は使用せず、「質量名詞」に統一する。

べて質量名詞であるという見解が長い間主流であった⁴。例えば、日本語の「りんご」は単独では単数とも複数とも解釈できる。数を明示するには「1 個のりんご」「2 個のりんご」のように助数辞が必要となり、「りんご」自体は形式上変化しない。

近年になって、日本語の名詞にも可算名詞と質量名詞の区別があるという議論が出始めた。1 つは、数える際に用いられる助数辞にその区別が現れているというものである。可算名詞に用いられる助数辞はあらかじめ決まっています、こどもであれば「人」、本であれば「冊」といったような「分類辞 (sortal suffix)」が用いられるが、分類辞は新しい表現が生ずることはまずないという点で「閉じた類 (closed class)」である。それに対して、質量名詞と共に用いられる「単位形成辞 (unit-forming suffix)」(例えば「3 玉の毛糸) と「計量辞 (measure suffix)」(例えば「3 尺の帯) は「開いた類 (open class)」で、用いられる容器や尺度等に応じて様々なものが同じ名詞に対して使用可能で、時代と共に「2 パックの豚肉」や「16 バイトの記憶領域」等の新しい表現も生まれる⁵。

日本語にも可算名詞と質量名詞の区別があるとする 2 つめの議論は、量化表現において可算名詞と質量名詞の区別が現れるという事実に基づく⁶。例えば、「どの N も」や「どの N か」といった、「どの」という「未定詞 (indeterminate)」と「も」や「か」という副助詞から成る量化表現は、N が可算名詞の場合にしか用いられない。例えば、「どの本も」は容認可能だが、「どの水も」が許されないのは、英語の *every book* と **every water* の対比と同じと考えられる。一方、例えば「ほとんど」といった量子は「可算名詞」にも「質量名詞」にも用いられる(例えば「ほとんどの本」と「ほとんどの水」はどちらも容認可能である)。英語の *some* や *most* についても同じことが言える。*some/most books* と *some/most*

⁴ 代表的な論考として Chierchia (1998; 2021) を参照されたい。

⁵ 詳細は飯田 (2019), Iida (2021) を参照されたい。

⁶ 代表的な論考に Watanabe (2006; 2017), 飯田 (2019) がある。

water はどちらも可能である。つまり、量化表現によって、可算名詞と質量名詞の区別をするものと、名詞の種類に関係なく用いられるものがあるということである。

本稿で取り上げるのは、上述の議論とは異なる3つめの論点で、日本語のある種の「部分表現 (partitive)」とそれに類する表現との間の意味の対比を考えると、日本語にも可算名詞と質量名詞の区別があるだけでなく、可算名詞については、さらに単数と複数という「文法的数」の区別もあるというものである。当該言語で可算名詞が質量名詞から区別されていても、文法的数においては中立という可能性は十分あり得るので、これはさらに強い主張となる。このような主張を展開したのが Watanabe (2017) である。本稿では Watanabe の主張の根拠となっている日本語の部分表現をさらに掘り下げて考察し、Watanabe の主張するように [±singular] ([±単数]) という素性で表し得る文法的数の概念が果たして日本語に存在するかどうかを再検討したい。

本稿での論の進め方は以下の通りである。まず、第2節で日本語の部分表現に用いられる量子子を分類し、その現れる位置に応じて2つのタイプがあることを確認した上で、それらに可算名詞と質量名詞の区別がどのように関わるかを考える⁷。第3節で日本語の部分表現に関する Watanabe (2017) のパラダイムを簡潔に紹介した後、2つのタイプの部分表現（正確には、部分表現とその変種）の意味解釈上の違いを詳しく論じた上で、第4節で代案を提示する。第5節はまとめである。

2. 日本語の部分表現に現れる量子子の分類

日本語の部分表現に用いられる量子子 (Q) にはどのようなものがあるかを見

⁷ 本稿では「遊離数量詞 (floating quantifier)」は考察から除外する。様々な言語における部分表現の分析とそれに関わる問題の概観には Falco and Zamparelli (2019) が参考になる。古典的な研究の代表としては Jackendoff (1977) と Selkirk (1977) がある。

る前に、量子子を 3 つのタイプに分けておきたい⁸。以下は、Jin (2019: 204) が中国語の部分表現の考察で用いた量子子の分類にならって、日本語の量子子を分類したものである (丸括弧内の英語は Jin の記述をそのまま引用した)⁹。

- (1) 割合や部分を示す量子子 (Fraction-/portion-denoting Qs) : 3 分の 1、大部分、一部、ほとんど (以下「タイプ 1」と呼ぶ。)
- (2) 助数辞のない曖昧な数量を表す量子子 (Classifier-less vague-quantity-denoting Qs) : 多く (多数、多量)、たくさん、少し (少数、少量) (以下「タイプ 2」と呼ぶ。)¹⁰
- (3) 助数辞を伴った数詞から成る量子子 (Numeral classifier Qs) : 2 冊、3 人、5 個、7 匹 (以下「タイプ 3」と呼ぶ。)

以下、上記の 3 つのタイプの量子子のうち、本稿ではタイプ 1 に焦点を当て、部分表現の一部として用いられるかどうかを見ていく。同時に、形式上は「可算名詞」と「質量名詞」の区別や「単数」と「複数」の区別がない日本語の名詞が、部分表現と共に用いられると、意味的な違いが生ずることを確認していきたい。

タイプ 1 の量子子は N が質量名詞としての解釈をもつ場合には、(4)に示すように、「N の Q」型と「Q の N」型のどちらにも用いられる¹¹。

⁸ Q が範疇名として適切であるかどうかは別問題である。飯田 (2019) ではこれらの Q は益岡・田窪 (1992: 34-36) にならって「数量名詞」と呼ばれ、名詞の一種とされている。特に、比率を表す量子子 ((1)の「タイプ 1」に相当) は「関係項」をとる「関係名詞」の一種とされる。後に提示する分析においても、少なくとも「N の Q」型の Q は名詞 (N) と考える。

⁹ 益岡・田窪 (1992: 34-36) は単独で数量を表す「数量名詞」の例として、「大勢、多く、多数、少数、いくらか、大部分、半分、全部」を挙げているが、これらを以下ではタイプ 1 とタイプ 2 の 2 つに分けることになる。「数詞+助数辞」から成る「数量名詞」がタイプ 3 に相当する。

¹⁰ 「多数」と「少数」は可算名詞に、「多量」と「少量」は質量名詞に限られる。「数」と「量」は助数辞ではないが、あらかじめ共起し得る名詞の種類 (可算名詞か質量名詞か) を限定する働きがある。「多く」と「少し」はどちらの種類の名詞にも用いられる。脚注 27 も参照。

¹¹ 使用可能かどうかの問題で、両タイプで意味が同じであるということではない。後で見るように、両者には意味の違いがある。

- | | | |
|--------|---------|---------|
| (4) a. | 3分の1の費用 | 費用の3分の1 |
| b. | 半分の費用 | 費用の半分 |
| c. | 大部分の費用 | 費用の大部分 |

一方、Nが可算名詞で単数解釈の場合には「NのQ」型しか許されない¹²。

- | | | |
|--------|----------|---------|
| (5) a. | *3分の1の辞書 | 辞書の3分の1 |
| b. | *半分の辞書 | 辞書の半分 |
| c. | *大部分の辞書 | 辞書の大部分 |

Nが可算名詞の複数解釈をもつ場合であれば、どちらの表現型式も許される。

- | | | |
|--------|---------|---------|
| (6) a. | 3分の1の学生 | 学生の3分の1 |
| b. | 半分の学生 | 学生の半分 |
| c. | 大部分の学生 | 学生の大部分 |

「NのQ」型と「QのN」型の両方が可能な場合について、その意味を考えてみよう。

- | | |
|--------|-----------------|
| (7) a. | こどもの大部分（「NのQ」型） |
| b. | 大部分のこども（「QのN」型） |

(7a)と(7b)の違いは(8)のような例文を見る限り、ほとんど意味の違いがないように見える。

¹² (5)の例の容認可能性の判断は「辞書」が1冊（単数）の場合である。

- (8) a. こどもの大部分が笑った。
b. 大部分のこどもが笑った。

実際、飯田（2019: 134）は、(8)の2つの例文を基に『『こどもの大部分』と『大部分のこども』のあいだに意味の違いがあるとは思えない』と述べている。確かに、(8)のような例を見る限り、「こどもの大部分」と「大部分のこども」の間に解釈上差がないように思えるが、例えば、(9)のように、(8)の「笑った」という述語を「水につかった」に変えると状況が変わってくる。

- (9) a. こどもの大部分が水につかった。
b. 大部分のこどもが水につかった。

(9a)では「こども」の全体が1人（つまり「こども」が単数解釈）の場合があり得る。1人のこどもの体の大部分が水につかったという解釈である。それに対して、(9b)では水につかったこどもが1人だけということとはあり得ない。(9a)にはさらに「どのこどもも体の大部分が水につかった」という、「こども」に分散演算子（*distributive operator*）が適用された解釈もできるが、そのような解釈も(9b)にはない。(9b)に許される解釈は「大部分」と呼ぶに十分な数のこどもの体が水につかったという解釈だけである。先の(8)の例で「NのQ」型と「QのN」型の間にもこのような差が出なかったのは、「笑う」という行為が、「水につかる」と異なり、こどもの体の部分と比率的に関わるものではないためと考えられる。もちろん、(9a)には「こども」が複数の解釈も(8a)と同様に可能である。その場合には、「問題になっている複数のこどもの中で大部分と呼ぶに十分な数のこどもが水につかった」という解釈になる。

このように、同じ部分表現でも意味的に異なる種類のものがあることがわかる。すなわち、1つの個体についてその部分を指す場合と、個体の集合についてその

部分集合を指す場合である。de Hoop (2003) は前者を“entity partitive”と呼び、後者の“set partitive”と区別している。上述の(8)と(9)の対比は、同じ「こどもの大部分」でも、(9a)では set partitive のみならず entity partitive の解釈も可能であるのに対して、(8a)では set partitive の解釈しか許されないために生ずる対比と考えられる¹³。

3. 2種類の部分表現——「NのQ」型と「QのN」型の分析

以上のように、質量名詞の場合には「NのQ」型と「QのN」型のどちらにも用いられるのに対して、可算名詞の場合には単数解釈は「NのQ」型にしか許されない。この点に注目した先行研究に Sauerland and Yatsushiro (2004; 2017) と Watanabe (2017) がある。両者は提案する分析は大きく異なるが、「NのQ」型と「QのN」型を派生の上で関連付けている点は共通している。具体的にいうと、タイプ1のQの例として「一部」や「ほとんど」を用いた「NのQ」型と「QのN」型間の解釈可能性の違いに注目しつつ、一方を他方から（あるいは両方を共通の基底構造から）派生する分析である。Watanabe (2017) で用いられている例を以下に挙げる。

- (10) a. りんごの一部が腐っている。
b. 一部のりんごが腐っている。

(10a)の「りんご」は単数と複数の両方の解釈が可能である。(10b)と比較して特

¹³ (9)の「大部分」(タイプ1のQ)を「多く」(タイプ2のQ)に変えると、状況がまた一転する。(ib)のみならず、(ia)にも「こども」が単数の解釈はない。(ib)の「多く」は基数的か比率的かという意味で多義的であるが、ここでは(ia)との対比を問題にしているので、比率的な解釈のみを考察の対象にする。

- (i) a. こどもの多くが水につかった。
b. 多くのこどもが水につかった。

これは「多く」という量量子が語彙的に set partitive しか表せず、entity partitive の解釈をもてないからである。このように部分表現の解釈の可能性は、Qの性質にも依存する。

筆すべきなのは「りんご」が単数として解釈される場合で、1個のりんごの一部が腐っているという解釈が可能な点である。それに対して、(10b)ではそのような解釈はできない¹⁴。Watanabe (2017) はこの対比に基づき、(10b)のような「QのN」型のNの位置に現れる名詞は複数の可算名詞でなければならないと結論づけている¹⁵。以下、この「QのN」型の表現について、Nに用いられる表現を広げることによって、「NのQ」型の表現との違いを再検討したい。

日本語では「NのQ」型と「QのN」型のどちらにも「の」が間に入るが、2つの「の」は同じではない。伝統的な日本語文法の用語を使えば、「NのQ」型の「の」は(ある種の「関係名詞」になっている)「数量名詞」の補部に付く接続助詞(益岡・田窪(1992: 51, 157-160)を参照)であるのに対して、「QのN」型における「の」は名詞を修飾する名詞的表現に付く判定詞「だ」(益岡・田窪(1992: 25-28)を参照)の連体形である¹⁶。Sauerland and Yatsushiro (2004; 2017)の分析では「の」は基底構造から部分表現に含まれるのに対し、Watanabe (2017)の分析では「の」はPFで挿入されるという点で、「の」そのものの出自は異なるが、「NのQ」型と「QのN」型のどちらの「の」も同じものとする点では、2つの分析には共通点がある。本稿の主張は、2つの「の」を異なるものとする

¹⁴ この対比は Sauerland and Yatsushiro (2004) が最初に「ほとんど」を用いて指摘した事実観察を基に、Watanabe (2017) が「一部」や「大部分」にまで拡張したものである。

¹⁵ Watanabe (2017) はこのことを導く精緻な統語的分析を提案している。また、「QのN」型のNが質量名詞の場合も英語の *clothes*, *funds*, *brains* のような必ず複数形で用いられる質量名詞 (*plural mass noun*) と同等のものであるとし、複数性 ([-singular]) が要求されるという条件は維持されているというのが Watanabe (2017) の主張である。本稿は基になっているパラダイムそのものを見直すことに主眼を置いているため、Watanabe (2017) の分析の詳細を紹介し検討するのは別の機会に改めたい。

¹⁶ 興味深いことに、似たようなパラダイムは中国語の部分表現にもある (Jin 2019 参照) が、日本語の「の」に対応する「的 (*de*)」は「NのQ」型に対応する[N-*de*(的)-Q]にしか付かず、「QのN」型に対応する中国語の表現は[Q-N]であり、*de* (的) が生じない。このことも「QのN」型の「の」は「NのQ」型の「の」とは働きが違う可能性を示唆する。

- (i) a. *dàbùfèn huāxiāo*
 most cost
 b. *huāxiāo de dàbùfèn*
 cost DE most

(Jin 2019: 205)

点で、そのどちらとも異なる¹⁷。詳細は後に述べるが、本稿で提案する「N の Q」型と「Q の N」型の構造の概要を、「こども」と「大部分」を例にして以下に挙げておく¹⁸。

- (11) a. [NP [N[NP こどもの] [N 大部分]]] (「N の Q」型)
 b. [NP [NP 大部分の] [N[N こども]]] (「Q の N」型)

(11a)では「大部分」が主要部であるのに対して、(11b)では「こども」が主要部となる¹⁹。また、(11a)では「大部分」が「こども」を補部として取っているのに対して、(11b)では「大部分」が「こども」を修飾する位置にあると考え、便宜上「指定部」の位置に置いておく。

「Q の N」と「N の Q」の本質的な違いは次の例で端的に示される。まずは質量名詞がNとして用いられた場合を考えてみよう。上記(4)では、タイプ1に「N の Q」と「Q の N」の両方が可能である例を示したが、Nおよび述語との関係で両者に違いが出る場合もある。一例として「出費」を用いる。

- (12) a. *出費の3割ですんだ。
 b. 3割の出費ですんだ。
 (13) a. 出費の3割は交通費だ。
 b. ?*3割の出費は交通費だ。

(12b)の場合、何の3割かという、「出費」ではなく、例えば「想定額」という

¹⁷ 本稿と同様の立場に飯田 (2019) がある。

¹⁸ それぞれの場合の「の」の範疇はここでは問わないことにし、「の」が付加されても全体の範疇は変わらないものと考えておく。

¹⁹ 脚注8でも述べたように、Qは部分表現の変種を分類する上での便宜上の名前であり、実際の範疇を表すものではない。「大部分」や「一部」等を上述の「数量名詞」と考えると、範疇としては「名詞」になる。

ことになろう。「部分」に対する「全体」が何になるかは文脈から決まる。そして「3割の出費」がそのまま「出費」と同額になる。(12a)がおかしいのは、実際の出費が想定額の3割ですんだのであれば、その想定額を「出費」と表現するのは適切ではないからである。他方、(13)では状況が異なる。(13a)は、出費の一部が交通費でそれが全体の出費の3割を占めると述べている。同じ事態を(13b)のように「3割の出費」と述べることはできない。この例では、出費が何の3割を占めるのか(つまり全体が何を指すのか)が単独では想像しにくいいため、容認可能性が落ちる。ここで(12)の「出費」を「見積額」に変えると、(14)が示すように、状況が逆転する。

- (14) a. 見積額の3割ですんだ。
b. ?*3割の見積額ですんだ。

(14a)の「見積額の3割」はもはや見積額ではない。(12b)の例でいう「出費」にあたる。全体と部分の両方を表現して「見積額の3割の出費ですんだ」と表現することもできる。一方、(14b)の「3割の見積もり額」は、(13b)と同様、十分な文脈が与えられないと全体が何を指すのかわからないため、容認度が落ちる。

関連する意味的差異として、「NのQ」型のNが特定の(specific)な解釈になるのに対して、「QのN」型のNは非特定の(non-specific)な解釈となる。これを裏付けるものとして次の対比がある。

- (15) a. どの人も借金の3割を返した。
b. どの人も3割の借金を返した。

(15a)はどの人もそれぞれの借金の3割に相当する金額を返済したという解釈になり、「借金」の部分は特定のである。これに対して、(15b)の「借金」はその人ご

とに決まる借金の金額を差し得ない。可能だとすれば、 n 件のローンのうちの $n \times 0.3$ 件を返済したという意味にはなるが、その「3割の借金」の「借金」の部分は非特定のである。

以上、本節では「NのQ」型と「QのN」型間の意味的違いとして、Nの役割の違いを論じた。「NのQ」型においてNは（多くの場合文脈に助けられた）特定の解釈をもつものに対して、「QのN」型においてNは非特定の解釈をもつことも示した。

4. 部分表現の主要部をめぐって

前節では、「NのQ」型と「QのN」型間の意味的違いとして、Nの「特定性 (specificity)」について論じた。本節では部分表現の主要部についてさらに考察し、それに基づいて、「NのQ」型と「QのN」型に関する分析を提示する。両タイプの端的な違いは、「QのN」型の表現が指すものは依然としてNが指すものであり、Qによってその数量や比率が指定されているのに対して、「NのQ」型の表現が指すものはそれ自体もはやNが指すものではなくなる可能性があるということにある。ただし、「NのQ」型がそれ自体Nでなくなる解釈を許すかどうかは、Nの種類（可算名詞か質量名詞か）や特性のみならず、「NのQ」型の表現を項としてとる述語の性質にもよる²⁰。

まず、次の例を考えてみよう。

- (16) a. 今日は強風が吹いて屋根が吹き飛ばれた家もありました。今も道路のあちこちに屋根の一部が落ちています。
- b. 今日は強風が吹いて屋根が吹き飛ばれた家もありました。?*今も道路のあちこちに一部の屋根が落ちています。

²⁰ さらに、Qの性質に依存する側面もある。脚注13を参照されたい。

(16b)の後半部はとても奇異に響く。前半部で吹き飛ばされた屋根の存在を導入し、それを受けて、(16a)のように、あちこちに落ちているものを「(強風で吹き飛ばされた)屋根の一部」と表現するのは問題ない。(16b)のように、「一部の屋根」とすると落ちているものそれ自体が「屋根」であることが求められる。つまり、屋根がそのままバラバラにならずに落ちているという(不可能ではないが)奇妙な状態になる。(16b)の後半部の容認度が落ちるのはそのためと思われる。逆に(16a)の「屋根の一部」は、瓦等、それ自体はもはや屋根とは呼べないものがあちこちに落ちている解釈が可能であり、十分にありそうな状態を記述しているため、容認度が高い。

さらに、Nの種類や特性がどう関わるのかを、Nに可算名詞を用いた例を基に考えてみよう。両タイプの違いを明確にするため、可算名詞を修飾する連体修飾節(関係節)を付けてみる²¹。

- (17) a. 収穫したりんごの3分の1が腐っている。
 b. ?*3分の1の収穫したりんごが腐っている。

(17a)は腐っていたりんごが収穫したりんご全体の3分の1を占めることを述べているが、「3分の1」と「収穫したりんご」を逆にした(17b)は、(17a)とは異なり、何かの3分の1が収穫したりんごに相当し、それが腐っていることを述べようとしている。しかし、(17b)の文を単独で発すると、全体が何を指しているのかが不明なため容認可能性が落ちる。

類例として、次の対比を考えてみてもよい。

²¹ このようにNを連体修飾節等で修飾すると「NのQ」型と「QのN」型の違いがはっきりするのだが、(10)のように修飾を伴わずに名詞を単独で用いると両タイプの解釈上の違いを捉えにくいいため、Nとして用いられる名詞の意味的役割の差を見過ごしてしまいがちである。

- (18) a. 用意した材料の半分で足りました。
 b. ?*半分の用意した材料で足りました。

(18a)に対して(18b)は不自然に感じる。用意した材料が何らかの半分に相当し、それで足りたというのが(18b)の可能な解釈だが、適切な文脈がない限り、それが何の半分なのかがはっきりしないため、容認度が落ちる。用意した材料が全体を占めているのであれば、(18a)のように表現するのが正しく、(18b)のように表現すると、用意した材料を含むより大きな集合の存在を含意してしまう。

次に、Nの種類や特性だけでなく、「NのQ」型の表現を項としてとる述語の性質もその解釈可能性に影響を及ぼすことを確認する。「こどもの大部分」に関しては、すでに(8a)と(9a)の対比で見たが、「りんごの一部」に関しても同じことが言える。例えば、次の(19)では、(10)と異なり、「りんご」はどちらの文でも複数の解釈しかあり得ない²²。

- (19) a. りんごの一部が出荷された。
 b. 一部のりんごが出荷された。

出荷は最低でも1個単位でなされるので、「りんごの一部」でも「一部のりんご」でも背後にある「全体」のりんごの数は複数でしかあり得ない²³。

本稿では真に部分表現と言えるのは「NのQ」型のみと考える。「NのQ」型である(10a)については、Nは数に関して中立的であってよい。「りんご」が(i)単数解釈であるにせよ、(ii)複数解釈であるにせよ、(iii)分散演算子を伴った複数名

²² 後で述べるように、「一部のりんご」に関して複数解釈が義務的なのは、正確に言えば、出荷されたりんごではなくその背後に想定されている「全体」のりんごの数である。

²³ Sauerland and Yatsushiro (2004; 2017) が例として用いている「本のほとんど」と「ほとんどの本」に関しても同様である。前者の「本」に単数解釈の可能性が出てくるのは「読む」という動詞を用いているからで、例えば「売る」に変えれば単数解釈はなくなる。

詞解釈であるにせよ、「その N の一部が腐っている」という解釈は自然に導かれる。他方、述語に「出荷された」を用いた(19a)には、上述の通り、述語の特性から(ii)の解釈しかない。「N の Q」型の場合には、それを項としてとる述語の意味次第で、表現全体が指すものがりんごの一部分ということもあり得るを見た。(10a)の「腐っている」という属性はひとつのりんごの一部分に対して成り立つが、(19a)の「出荷された」という属性はりんごの部分に対して成り立つものではない。そのため、同じ「りんごの一部」でも(19a)では「全体」を表す「りんご」が1個という解釈は排除される。

問題は(10b)と(19b)の「Q の N」型である。なぜこの場合には N は上記の(ii)の複数解釈しかできないのであろうか。本稿では、まず、「Q の N」型の表現は「すべてのりんご」と同様、通常の量化表現であると考え。したがって、例えば「一部のりんご」が指すものは、ある一定の範囲内で「一部」と言える「りんご」である。故に、(10b)の「りんご」はそのまま「腐っている」という述語の項である。(12)-(16)の「Q の N」型の例では、文脈等によって「全体」を表すものが容易に想定可能な場合に容認可能となとした。(10b)の場合の背後にある「全体」は、ただの「りんご」ではなく、例えば「収穫したりんご」を考慮することができる。その場合、「一部のりんご」とは「収穫したりんごの一部であるりんご」となる。極端な例として、収穫したりんごのうち1個だけが腐っている（あるいは出荷された）場合でも、(10b)や(19b)のように表現することは可能だと思われる。しかし、「腐っている」にせよ、「出荷された」にせよ、「一部のりんご」はあくまで1個のりんごを最小単位として述べていることが重要なポイントである。したがって、「一部のりんご」という表現は背後に複数のりんごが存在している場合に限って用いられることになる。

言い換えれば、「一部のりんご」のような「Q の N」型で複数解釈が要求されるのは背後にその存在が前提とされるりんごの集合の要素数に対してであって、音形に現れる「りんご」に対してではないということである。上で触れたように、

(19b)の極端なケースとして、出荷されたりんごが1個だけだったという場合も論理的には真と言えるかもしれない。しかし、「一部」とわざわざ言うからには1個だけではないだろうという語用論的な観点が関わるので、出荷されたりんごの数も複数が望まれるが、ポイントはあくまでりんごの母集合の要素が複数であることにある。(10b)の腐っているりんごに関しても同様である。(10b)と(19b)の「一部のりんご」でりんごが複数の解釈しかないというのは、この母集合の要素の個数を言っているのもあって、腐っているりんごや出荷されたりんごのことではない。むしろ重要なのは「一部のりんご」が最低限「りんご」と呼ぶことができるものでなければならないということで、その点が(10a)と(19a)の「NのQ」型と違う点である。

このことは表現全体の「主要部」を考えてみると容易に理解できる。「NのQ」型ではQが主要部であるのに対して、「QのN」型ではNが主要部である。「一部のりんご」においては「りんご」が主要部であり、この表現が指すものは(個数はともかく)りんごでなければならない。これに対して、「NのQ」型の「りんごの一部」では「一部」というQが主要部であり、この表現全体が指すものはや1個のりんごとしては成立しないものであってもかまわない。

別の言い方をすれば、「NのQ」型は文脈によって決まるNの対象物からQによって指定された部分を取り出すという意味機能をもつ純粋な部分表現であるのに対して、「QのN」型はQがNの対象物を量化する働きをもつ量化表現にすぎないということである。つまり、「QのN」型は、Qの位置を占めている量子子に、Nが省略された「NのQ」型の部分表現が隠れている点を除けば、表現全体は「すべてのN」のような通常の量化表現の場合と同類であるというのが本稿の主張である。

このような見方をすると、Watanabe (2017: 10) が彼の分析の支持証拠としてあげている(20)に見られる対比も、「QのN」型のQが通常の量子子と同様の働

きをしていることを示しているためと再解釈できる²⁴。

- (20) a. [それらのりんご]の一部が {腐っている／出荷された}。
b. *一部の[それらのりんご]が {腐っている／出荷された}。

(20a)のように、「NのQ」型はNの部分に「それらの」のような指示詞（限定表現）を付けることができるが、(20b)のように、「QのN」型ではNの部分に指示詞を付けることができない。(20b)が許されないのは、すでに指示詞で限定された名詞表現をさらに量子で限定することができないためである²⁵。

5. まとめ

本稿では、可算名詞と質量名詞の区別が日本語にも文法的に存在することを立証する議論として挙げられているもののうち、部分表現を用いた議論を再検討した。注意すべきことは、問題になっている概念的な区別が当該言語でもできるということだけでは、それがその言語の文法的区別として存在しているという結論にはならないということである。人間共通の認知機能に帰することが可能なものは（狭い意味での）「文法」の射程外にするのが、最近のミニマリストプログラム（Chomsky (2020; 2021) 等）の研究手法である。Watanabe (2017) は、この点を十分に考慮した上で、「可算名詞」と「質量名詞」の区別のみならず、単数・複数という「文法的数」の区別も日本語に存在することを主張した重要な論考であった。本稿の主眼は、その議論が依拠している部分表現に関するパラダイムを整理し直し、その特性を再検討することにあった。

本稿での主張をまとめると次のようになる。まず、可算名詞と質量名詞の区別

²⁴ Watanabe (2017: 10-12) ではそこで想定されている移動に対する「介入効果 (intervention effect)」の現れとして、この対比を説明している。詳細は同論文を参照。移動を仮定しない本稿では代案を提出した。また、(20)は同論文が挙げている例に述語の例として「出荷された」を追加したものである。

²⁵ 同様の対比が中国語の[N-de(的)-Q]と[Q-N]の間に見られることが Jin (2019: 208) で指摘されている。

は日本語の文法体系にも組み込まれていると言える。そのことは、冒頭で紹介したように、共に用いられる助数辞や量子子に明確な区別があることから見てとれる。さらに、部分表現とそれに関連する量化表現の特徴からも裏付けられる。

本稿ではこの部分表現をめぐる論点を詳しく検討した。部分表現を取り上げたのは、単に可算名詞と質量名詞の区別だけでなく、数が文法的概念として日本語にも存在するかどうかにまで議論が及ぶからであった。

部分表現と関連する表現に基づく本稿の結論は、上記の助数辞や量子子に基づく結論と同様、部分表現にまつわる一連の現象は可算名詞と質量名詞の区別が日本語にも存在することを示唆するが、可算名詞の文法的数については「中立」という域を超えないというものである。とりわけ Sauerland and Yatsushiro (2004; 2017) が“reverse partitive”と読んだ「Q の N」型は真の部分表現ではなく、「部分表現もどき」と言ってよい。「Q の N」型の Q は、「多くのりんご」や「2つのりんご」等と同様、通常の量子子と見なすべきであり、N に可算名詞が用いられた際に複数解釈が義務的になるように感じられるのは意味的な要因が関与している。複数解釈は、この量化表現が意味的に適切に用いられるために想定されなければならない母集合（「全体」）の個体数に対して必然的に生じるものであって、音形化される N そのものの数とは直接関係しない²⁶。

それに対して、「N の Q」型は真性の部分表現であり、音形化される N の可算名詞と質量名詞の区別が重要な働きを示す一方、可算名詞の場合の文法的数に関しては中立である（他の条件が整えば単数・複数どちらの解釈も可能である）²⁷。とりわけ、「N の Q」型の表現で N が可算名詞で単数解釈をもつ場合は、この表現が指す対象物が N の指しているものに満たない（もはや N が指すものではな

²⁶ 「Q の N」型では背後に母集合が想定できる必要があるという観察が Sauerland and Yatsushiro (2004; 2017) や Watanabe (2017) の分析でどのように捉えられるかは明らかではない。

²⁷ 「可算名詞」か「質量名詞」のいずれか一方にしか用いられない Q（「多数」対「多量」、「少数」対「少量」、「半数」対「半量」等）があることから、この区別が部分表現に重要な役割を果たしていることがわかる。「一部」、「大部分」、「半分」のようにどちらにも使えるものがあるの言うまでもない。

い) 解釈 (entity partitive) になる。りんごが 1 個しかない場合、「りんごの一部」はもはやりんごではない。そのような解釈が可能になる理由は、この構造では主要部が N ではなく Q (量化子) のほうであることに加えて、N が指すものの一部にも成り立つ属性を述べる述語 (「りんご」の場合には「腐っている」等) が用いられていることによる。つまり、「N の Q」型で N に単数解釈の可算名詞が許されるのは、(i)Q として用いられる量化子の種類だけでなく、(ii) どのような述語と共に用いられるかにも依存する。上記(8)のような例文では、飯田 (2019: 134) が述べたように、意味の違いがないようにすら思えるわけである。また、N に分散演算子が働いているように思える解釈 (例えば「いずれのりんごも部分的に腐っている」という解釈) も、N に単数解釈を許す述語が使われている場合に限られる。したがって、上記の(i)と(ii)の条件を満たさなければ、そのような解釈も生じない。

可算名詞にも質量名詞にも用いられる量化子が「N の Q」型の表現の Q として用いられる場合に「全体」を表す名詞 N が可算名詞で単数解釈を許すのは、「腐っている」のようにその表現を項にとる述語が個体の一部分に成り立つ属性を表し得るものに限られるという意味的な要因によるものである。したがって、N そのものの文法的数の区別は日本語にはなく、文法的数に関しては中立であると考えるのが妥当であると思われる。「N の Q」型の表現で N が単数解釈になり得るのは、極めて限られた条件下においてのみである。

他方、部分表現に可算名詞と質量名詞の区別が関与していると考えられるのは、その区別に反応する量化子が用いられる場合があるためであり、部分表現に特有の特徴ではない。したがって、日本語において、可算名詞と質量名詞の区別があることを示す証拠は、冒頭で挙げた(i)助数辞に基づく議論と(ii)量化子に基づく議論の 2 つであり、部分表現の分析からこの点について言えることは(ii)の範囲を出るものではないように思われる。

参考文献

- Chierchia, Gennaro (1998) “Reference to Kinds Across Languages,” *Natural Language Semantics* 6, 339-405.
- Chierchia, Gennaro (2021) “Mass vs. Count: Where Do We Stand? Outline of a Theory of Semantic Variation,” *Things and Stuff: The Semantics of the Count-Mass Distinction*, ed. by Tibor Kiss, Francis Jeffry Pelletier, and Halima Husić, 21-54, Cambridge University Press, Cambridge.
- Chomsky, Noam (2020) “The UCLA lectures,” ms., MIT and University of Arizona.
- Chomsky, Noam (2021) “Minimalism: Where Are We Now, and Where Can We Hope to Go,” *Gengo Kenkyu* 160: 1-41.
- Falco, Michelangelo and Roberto Zamparelli (2019) “Partitives and Partitivity,” *Glossa: A Journal of General Linguistics* 4(1): 111, 1-49.
- Hoop, Helen de (2003) “Partitivity,” *The Second Glot International State-of-the-Article Book*, ed. by Lisa Cheng and Rint Sybesma, 179-212, Mouton de Gruyter, Berlin.
- 飯田隆 (2019) 『日本語と論理』NHK 出版, 東京.
- Iida, Takashi (2021) “Japanese Semantics and the Mass/Count Distinction,” *Numeral Classifiers and Classifier Languages*, ed. by Chungmin Lee, Young-Wha Kim, and Byeong-uk Yi, 72-97, Routledge, London and New York.
- Jackendoff, Ray (1977) *X̄-Syntax: A Study of Phrase Structure*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Jin, Jing (2019) *Partition and Quantity: Numeral, Classifiers, Measurement, and Partitive Constructions in Mandarin Chinese*, Routledge, London and New York.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版, 東京.
- Sauerland, Uli and Kazuko Yatsushiro (2004) “A Silent Noun in Partitives,” *NELS* 34, 101-112.

- Sauerland, Uli and Kazuko Yatsushiro (2017) “Two Nouns in Partitives: Evidence from Japanese,” *Glossa: A Journal of General Linguistics* 2(1): 13, 1-29.
- Selkirk, Elisabeth (1977) “Some Remarks on Noun Phrase Structure,” *Formal Syntax*, ed. by Peter W. Culicover, Thomas Wasow, and Adrian Akmajian, 285-316, Academic Press, New York.
- Watanabe, Akira (2006) “Functional Projections of Nominals in Japanese,” *Natural Language and Linguistic Theory* 24, 241-306.
- Watanabe, Akira (2017) “The Mass/Count Distinction in Japanese from the Perspective of Partitivity,” *Glossa: A Journal of General Linguistics* 2(1): 98, 1-26.